

油山の宝物さがし ～製粉水車と樋井川～

＜柏原にあった大きな水車＞

森ものがたり10年9月号で柏原の石橋様から水ヶ谷近隣7家で水車を共同利用していたことをうかがった旨ご紹介しました。その折、柏原では山本さんという方が米等を搗く大きな水車を持ち営業されていたと聞きました。水車はいつころどのように使われていたのか気になりました。

＜「北部九州製粉水車考」が語ること＞

福岡市総合図書館で楽しい資料と出会いました。付録を含め30ページ以上の詳細な研究「北部九州製粉水車考」から柏原周囲にスポットをあて非常に簡便に要約しご紹介します。

日本の水車の最盛期は幕末期から昭和までの約100年。製糸・紡績など産業用水車は電気等他の動力に変わり最後昭和30年代まで残ったのが精米・製粉などの農事用水車でした。

小郡の篩絹（ふるいきぬ）商、田中三次郎商店の資料には往時の北部九州製粉水車の様子が示されています。

篩絹とは製粉時に粉を濾す絹の網。明治後半から大正にかけて活動した初代市郎氏は竹かごに100尺巻きの反物状態で5,6種の篩絹をいれ、正月2日から担いで行商しました。

効率よくもれなく巡回するため作成したのが『水車巡路道詳覧（しょうらん）圖』（明治20年改）。いわば営業ルートマップ。道、川、橋、道しるべの木等が描かれています。水車は600余。今の太宰府、那珂川町周囲を示す詳覧圖には31の水車があり「上長尾」の字が見られます。

これと対をなすのが『篩絹台帳』。営業台帳で大正7～13年分には樋井川村柏原では山本姓、鶴田姓各1名、上長尾では荒川姓1名のお名前があがっています。

北部九州では他産業の動力水車を加え各河川の流域にたくさんの水車が並んでいたのです。



＜羽黒神社そばの樋井川＞

＜田中三次郎商店のその後＞

詳覧圖等は偶然のことから日の目を見ました。4代目が小学校高学年のころ（昭和20年前後？）母上から倉庫2階の整理を命じられあまりに古い資料が多かったので2階から袋ごと投げ落とし燃やしました。幸いなことに夜中に雨が降り火が消え焼け残り、田中家の最も古い資料として大切に保管されるに至りました。（参考2）

昭和30年前後化学繊維が輸入され篩絹業界は打撃を受けました。同社は合成繊維の網、水産機材、石臼製粉機器、魚類・鳥類・野生動物標識などに分野を広げ歴史を続けておられます。【柴戸】

参考資料

- 1.福岡市総合図書館研究 紀要・第4号 抜刷
「北部九州製粉水車考」鳥巢京一 2003
- 2.日韓石臼シンポジウム ホームページ
<http://bigai.world.coocan.jp/msand/miwa/misymposium.html>
- 3.田中三次郎商店ホームページ